

代読ボランティアへの招待

1. 知的障害者の読書支援に必要なこと

知的障害者が本、雑誌、新聞などを読んで楽しみ、必要な情報を得るためには、2つのことが必要です。

- ①読むための人の支援があること
- ②知的障害者の読む能力と生活年齢に応じたわかりやすい本や視聴覚メディア資料等があること

このテキストは、知的障害者にこれらを保障し提供するための知識と技能を、代読ボランティアを希望する方に身につけていただく目的で制作されました。

知的障害者は文字を読んで簡単な内容であれば理解できる人から文字がまったく読めない人まで、障害の程度に開きがあります。しかし、軽度の人でも一般書物や新聞を読んで十分に理解するのは難しく、重度の人がさらに難しい状態にあることは、誰もが知っているところです。

私たちは、日々、本、雑誌、新聞、ウェブサイトを見て読んで、生活しています。読むことを楽しみ、いろいろな情報を得ながら暮らすことは、あたりまえのことですが、知的障害者には、このあたりまえの生活が保障されていない現実があります。彼らが、私たちと同じように見て読んで情報を得るためには、支援が必要です。自分が読みたい本、雑誌、新聞などを快く安心して読んでもらえる人の支援を必要としています。

2. 代読ボランティアとは

人に読んでもらう方法として幼児から高齢者、障害者まで広く行われているのが、「読み聞かせ」です。読み手が選んだ本や紙芝居を読んでもらう読み聞かせは、ほとんどの人がしてもらった経験をおもちではないでしょうか。それに比べて「代読」は、今のところあまり聞きなれない言葉かもしれません。この講座の名称を「代読ボランティア養成」と

した理由は、「代読」という人に読んで聞かせる方法を、「読み聞かせ」と同様に、幅広く多くの人に知っていただきたかったからです。

「代読」をシンプルに言えば、「聞き手が読んでほしい本を代わりに読む」ことです。読み手が選んだ本を聞き手が聞く「読み聞かせ」とは異なっています。幼い子どもが「この本読んで」とお願いすると、大人は笑顔でページをめくりながら子どもに読んであげます。また、特別支援学校では、先生が知的障害のある子どもが読んでほしい本を読んであげます。このように子どもの頃には親や先生に、一対一で読んでほしい本を読んでもらった経験を多くの方がもっていると思います。しかし、青年になり大人になると、「この本読んで」とは言いにくくなり、誰かに読んでもらう関係をもつことは、ほとんどなくなります。代読ボランティアは、「この本読んで」と言える関係を積極的につくり、相手が読んでほしい本を代わりに読む人なのです。

代読者は、知的障害のある聞き手がわかるように読みます。本の内容が違ってしまわない範囲で言葉を補ったり、難しい言葉や文章をわかりやすく言い換えたり、登場人物の気持ちや状況が理解しやすいように、ときには感情を入れて読んだりします。二人で本を一緒に見ながら、読んでいる本について聞き手が質問したり話したりできる関係を持ち、コミュニケーションをとりながら読書の楽しみを共有します。

また、代読する読み物は、本に限りません。新聞、雑誌、ほかにもリーフレット、パンフレット等も含まれます。今までにスポーツや一般の新聞、旅行のパンフレット、アイドルやテレビ番組の雑誌等を読んでほしいと持ってきた人たちがいます。代読は、知的障害者にわかりやすく情報提供することでもあります。生活をするうえで知りたいことを知る、わからないことを理解する大事な機会となります。

3. 講座と代読ボランティア活動の経過と状況

代読ボランティア養成講座は、「知的障害者への読書サポート講座」という名称で2017年に始まりました。2022年度まで、関西（大阪、奈良）で5館¹、関東（東京）で2館開催されています。3日間で6講座を同じ内容で実施しました。2017年と2018年で開催した4館²のべ参加者数は412人（1館の平均は約100名）で、そのうち3日連続参加者数は76人でした。最終日のアンケートからは「ぜひ機会があれば代読ボランティアをやりたい」「何らかの形で出張の代読の会を、講座の受講者メンバーで形づくってみたいです」「もっと代読を経験したい、活動したい」と、参加者の積極的な意見が多数出

1 5館のうちの1館は、大阪府立中央図書館において「令和元年度大阪府図書館司書セミナー読書サポート講座」という名称で大阪府の図書館関係者（公共図書館や学校図書館の司書や職員、司書教諭等）を対象に同じ要項で実施した。全3日通しの参加者は18人、延べ104人の参加があった。

2 JSPS 科学研究費助成金基盤研究（C）課題番号16K00453を受けた「公共図書館における知的障害者への合理的配慮のある方に関する研究」（研究代表 藤澤和子）により実施した。

ています。

3日連続参加者を対象に、代読の実技を中心としたステップアップ講座（半日）を開催し、受講した希望者が各図書館でボランティア登録をして活動が開始されています。図書館によっては、ステップアップ講座の代わりに施設で行われている代読を見学する方法が採られています。残念ながらコロナ禍で難しい時期が続いていますが、生駒市立図書館からは、地域で代読ボランティア活動の広がっている様子が報告されています。

養成講座を開催した図書館は代読を希望される地域の知的障害者が利用する施設と連携し、代読ボランティアが施設へ訪問する方法と知的障害者が図書館に来館する方法の2とおりを採っています。訪問では、施設内で希望する人に代読をします。図書館への来館では、休館日を利用されることが多く、館内で代読します。どちらも、「また（施設に）来てほしい」「また読んでほしい」「また（図書館に）来たい」という要望が、代読を受けた人や施設のスタッフからあがっています。

4. テキストの内容

このテキストの内容を紹介します。

1章から5章は講座の内容、6章は代読ボランティアの活動報告です。この講座は代読ボランティアの養成を主な目的としていますが、「代読」とあわせて「読み聞かせ」の実線方法も含めています。支援方法は一つではありませんので、テキストも講座と同様に基礎知識と役立つ技能を学べる内容で構成しています。

1章「図書館の障害者サービスと知的障害者」は、公共図書館の障害者へのサービスの歴史と理念、近年の障害者に関わる法整備と知的障害者へのサービス提供の充実に向けて行われている取り組みを紹介します。

2章「知的障害者にとってわかりやすい本と視聴覚資料」は、知的障害者がわかりやすい表現で生活年齢に応じたさまざまなジャンルの本を必要としていることを、ご本人たちへの調査結果をもとに紹介します。わかりやすい本として彼らを主な対象とするLLブックの概要や表現の特徴、また、見て聞けるマルチメディア DAISY 図書について説明します。

3章「知的障害者との関わり方」は、知的障害の障害特性や多様性、言語理解とコミュニケーションの程度について説明し、彼らを支援するときの基本的な姿勢と障害特性に合わせた対応について示します。特性ゆえの特徴的な行動を示す事例をあげて、その関わり方を具体的に解説します。

4章「知的障害者への読み聞かせやブックトーク」の講座は、知的障害者が興味をもって読んで（見て）みたいと思う本を選んで効果的に紹介する方法、複数の知的障害者が楽しめる読み聞かせと本を紹介するブックトークの方法を具体的に説明します。講座では、読み聞かせの演習も行います。

5章「知的障害者への代読と実習」は、代読とは、何のためにどのような読み方をするのか、代読の方法や当事者（聞き手）への読み方と対応の基本を説明し、代読者が気をつけることを具体的に示します。知的障害者を対象に代読する実習の方法を紹介し、受講者から寄せられた質問についてQ & Aで答えます。

6章「代読ボランティアの事例」は、奈良県生駒市図書館の取り組みを報告します。養成講座開催をきっかけに、館内整理日（休館日）に障害者支援施設の来館、閲覧貸出を行う図書館開放事業が始まり、現在、講座の修了者が積極的に障害者支援施設の利用者に代読活動を行っています。図書館、障害者支援施設、ボランティアが連携し協働する代読ボランティア活動の経過や現状、代読者や当事者らの思いを紹介します。

巻末の「代読ボランティア活動ルポマンガ」は、図書館で行われた代読ボランティアの活動の様子を描いています。代読のポイントがよくわかるように紹介されています。

5. これから

代読ボランティア活動を広げ普及するためには、全国の多くの図書館でこの講座が開催されること、地域の障害者施設や事業所、知的障害者の支援団体等がこの活動に積極的に協力されることが必要です。本や視聴覚資料と知的障害者と代読者を結びつけるキーパーソンとして、図書館の役割は大きいものがあります。

2022年度から知的障害者の家族や本人や支援者から構成されている全国手をつなぐ育成会連合会が講座開催の費用の一部を、数館に助成されることになりました。このことは、知的障害者の読書支援を、当事者団体が必要とし支援する意向を明らかに示すものです。

図書館と地域の障害者支援施設や事業所は、連携を進めてボランティアが活動できる場や機会を広げ、代読ボランティアは、対象者とのコミュニケーションを深め、多くの人に読む楽しさを届けていく。地道な取り組みではありますが、確実に効果的な読書支援につながります。そのための歩みを、ぜひ一緒に進めていきましょう。

なお、さまざまな地域で開催される講座の講師が、このテキストの執筆者とは限りません。各講座の講師は、専門的知見をもつ経験豊富な方が務めます。各講座の骨子は同じですので、執筆者と異なる講師が務める場合にも参考にしてください。 (藤澤 和子)